

支部ニュース

北海道支部

先の支部だよりでは“地方主義”の振興について一席論じました。ところがどうでしょう、幾月もしないうちに“地方の時代”とかで俄然にぎやかになりました。もっとも、本誌の記事がそのキッカケになったなんてことはまったくなく、筆者はケゲンな顔をして眺めております。

(判ったぞ！地方選挙が近いからなのだ！)

さて、当支部、春の大会が終わると、会員一同どっと疲れが出た感じで、事務局幹事が彼自身の諸々の仕事でえらく忙しかったせいもあり、研究会等を活発にやるまでには至りませんでした。それでもようやく2月に至り、つぎの月例講演会と研究会を開催することができました。

月例講演会： 開催月日 2月2日 午後

テーマ 政策科学について

第1部 政策科学の概念と方法

第2部 トータルシステムとしての技術予測

講演者 第1部 福島康人(防衛研修所)

第2部 湊 晋平(武田薬品工業)

研究会： 開催月日 2月2日 午前

テーマ 北海道をめぐる国際関係について

第1部 ソ連極東の経済および軍事情勢

第2部 北海道における陸上防衛力の現勢

講演者 第1部 福島康人(防衛研修所)

第2部 荒田東雄(自衛隊札幌地方連絡部)

このように同じ日に2つの会を重ね、講師各位には大変御苦勞をお願いしました。おかげさまで出席者一同に大いなる感銘を与えることができました。各講師の御尽力に厚く感謝の意を表します。

ところで、研究会のテーマとしておそらく前例がないと思いますが、この種の問題は諸外国では重要なORの課題として盛んに議論されていると聞いています。筆者の勤務先はじめ多くの大学で、“国際関係論”といった科

目が一般教養課程にあって、このような経済・外交・軍事にわたる広範な問題が扱われ、学問の対象となっているようです。これにORが関心をもってあかんはずはありません。それに北海道は三方向を指呼の間で隣国と接する土地です。ソ連が占拠しているハボマイ諸島と根室半島の間の数キロほどのゴヨウマイ水道は、結氷期には歩いて渡れるのです。18世紀末、仙台の林子平は「海国兵談」を著して国際関係について啓蒙をはかりましたが、今日の日本人の国際感覚なるもの、当時に毛の生えた程度とみるべきでしょう。パリとロンドンを見物し、英語を喋り、洋食の食い方を知っていれば“国際人”だといわんばかりです。南北に長く、東と西でもまるで様子の違う複雑にして多様な自国の事情など、驚くほど判っちゃいません。もっとも、地理にヨワイのはこの国の人間も同じですが、日本人の場合は少々事大主義的傾向が強いようです。ヒトカップ湾、ランソン(あるいはドンドン)、これらの地名(速く地図をもってこい!)が、ここ40年の歴史の中で、2度もきわめて大きな意味をもつに至ったことを記憶している人士はどれだけいるでしょうか。さて、この度の講演会と研究会に際して、北海道人の国際関係についての深層心理を垣間見たと思います。人間には、考えるだけでもおぞましいことに対しては、あたかもそれが存在しないかのように振舞う性質があります。北海道人の隣国に対する意識にはまさにそれがあって、18世紀以来の根深い“恐露感情”で、「何かという強大な武力に物をいわせたがるコワイ熊を刺激してはいけない」と考えるようです。これは北海道に住む本物の熊に対してもおよび、諸外国でならとくに絶滅に瀕しているだろうこの動物も、銃弾にさらされることなく平和に繁殖を続けているようですから、御来道の折は喚われぬように御用心ください。

一方、ソ連人は概して理屈を好み、何事にも必ず何らかの理論的根拠(屁理屈であっても)をつけるよう心がける国民です。彼らの側からみると、日本人は感情的でずいぶんと理屈の判らぬ厄介な相手に見えていることでしょう。(何?逆じゃないかって?いや、実はそこが問題なんですよ)国際関係は花とジャンペンでジャンジャンとしめる前に、十分現実を踏まえ、理性的に取扱われなければなりません。それに今回の講演会、研究会が役立てば幸いと思っております。